

解答・解説

問1 「奉りし」を正確に捉えて正しい解釈を導く。「奉る」は多義語の敬語で、本動詞になる場合と補助動詞になる場合がある。

「奉る」本動詞 謙譲語→①差し上げる(「与ふ」の謙譲語)、②参上させる(「遣る」の謙譲語)
尊敬語→③召し上げる(「飲む」「食ふ」の尊敬語)、④お召しになる(「着る」の尊敬語)、⑤お乗りになる(「乗る」の尊敬語)
補助動詞 謙譲語→「おくす」「〜(じ) 申上げぬ」。

ここでは動詞「継ぐ」に続いてるので補助動詞である。これに続く「し」は過去の助動詞「き」の連体形。下に体言「こと」や体言の代用の「の」などを補って現代語訳を考えるとよい。また、「いかに」は「どのように」の意。下に「思ふ」などが省略されている。

▶選択肢判定チェック▶

- ア 命を助け申し上げたのはどう思っているのか。
【「奉りし」を「し申し上げた」としている。「いかに(思ふ)」の訳が適当である。(○)】
謙譲語の補助動詞がない。「いかに」「申し上げる」の意はない。(×)
- イ 命が助かったのはどう申し上げたらよいのか。
【「奉り」に尊敬の補助動詞の意味はない。(×)】
謙譲の補助動詞が訳出されていない。(×)
- ウ 命を助けられなさったのはどうしてなのか。
謙譲の補助動詞が訳出されていない。(×)
- エ 命が助かりなさったことをどう考えなさるのか。
よって、正解はア。

問2 本文の流れを確認する。

▶選択肢判定チェック▶

- ・大納言 部屋に向かってくる大きな足音に、武士が来て自分は殺されるのだと身構える。
・入道 (＝平清盛)
【この一門滅ぼすべき由の結構】(＝平家打倒の計画)を企てたとされる大納言に対する強い憤り
【様子】「もつての外に怒れる気色」、「しばし睨まへ」
計画が未遂のうちに大納言を捕えられたのは、「当家の運命」が尽きていないから。裏切りの理由を大納言の口から直接聞くと言う。
・大納言 「まったくさる事候はず」と言って、あくまで平家打倒の計画はないと主張する。
【理由】恩を仇で返されたこと(問1)

▶選択肢判定チェック▶

- ア 大納言は、命を助けられたことについて平家に恩義を感じてはいなかった。
【日頃の……承らん】とあるが、その返答次第で助命するという内容は本文にない。(×)
- イ 入道は、内府が懇意にしていた大納言を、弁明次第では助けようとしていた。
【当家の運命尽きぬによりて迎へ奉りたり」と合致する。(○)】
大納言は平家打倒の計画への関与を否定している。(×)
- ウ 入道は、平家の運が尽きていないために大納言の計画が発覚したと考えた。
エ 大納言は、平家に刃向かうとした計画を認めながらも、必死に助命を訴えた。
よって、正解はウ。

古文の世界

死生観

本文では清盛が「恩を知らぬをば畜生とこそ言へ」と成親を罵倒する。鳥獣虫魚の総称である「畜生」は仏教における輪廻転生の考え方で、人間道から身を落とした結果の生の形の一つとされる。すべての衆生(生き物)は六道と呼ばれる六つの世界(天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道)で生死を繰り返すが、死後、来世でどの世界に生まれ変わるかは、その前世(つまり現世)の行いによると考えられた。親子や夫婦など、現世で深い間柄になる人間同士は前世からの縁が深いためとするなど、輪廻の考え方は当時の人々に深く内面化されていた。

出典 平家物語

倉前期。作者は信濃前司行長とも言われるが、成立年とともに未詳。平清盛を中心とする平家一門の興亡を、仏教的無常観を主題として叙事詩的に描く。語り物として琵琶法師によって広められた。

解答・解説

文法 Q
省略 Q
解答と品詞分解・現代語訳

大納言は

尊敬語

本動詞

作者

から

大納言

101

格助

白い大口袴の裾を内側に丸め込んで履き、

聖柄の刀をゆったりとゆるめて挿す（という普段の）

格助　ラ四・已(命)　存・体

大納言を少しの間睨みつけ、

「いったいあなたは、平治の乱（のとき）にもとづくに

謙讓語

補助動詞

入道

5

大納言

 \wedge

格助

（平家に恩義を感じていないというのか）

この

係助
八四厘

ようなあなたが、恩知らずな計画を立てた。）

大納言
を

力上二·未
消·体

尊敬語

本動詞

作者

か

入道

丁寧語

補助動詞

•

○

人の讒言でございましょう。

十分念入りにご吟味ください」と申し上げなさつ

夕下二・未消田

大納言に

単語
Q
解答

⑦ 武士。さむらい。
⑧ つかがう。お聞きする。
⑨ しかしながら。そうではあるが
⑩ お呼びになる。お招きになる。